希
のぞみ

希　09

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18579968

ヒュンマ

ダイ大　ヒュンマ小説です。
本編が終わってから二年後にダイが見つかり、しばらく経った後のお話です。ヒュンマ、ポップ→←メルル、ダイレオ、アバフロ、アポマリ前提でお話が進んでいます。
ちょっと大人向けの話題や匂わせがあるので、わからない方は大人の方に聞いたりしないで、こっそりと調べましょう。（こら）
◇マァム視点　◆ヒュンケル視点

Table of Contents

希　09

◆

「姫っ！　いけません！！」
　飛び立とうとするレオナを、傍に控えていたアポロが制止する。
「行くわよ、この国のことですもの」
「ですが！！」
「確かに、私が行かなくてもいい案件ね。でも、仲間に頼られて助けないって選択肢は、私にはないのよ！」
「姫さん、アポロさん。ヒュンケルとはオレとダイが一緒に行く。着いたらすぐさまルーラで戻ってくるから、姫さんとどう処理するか検討しておいてくれ」
「ポップ君っ」
「敵陣でマァムが一人でいるんだ」
　ポップの手慣れた指示に感心しながら、オレは一番重要なことを再度告げる。オレの言葉に、ポップもアポロも頷いた。
「オレのキメラの翼の使用限度は、オレ以外に三人だ。大勢は連れていけない」
「オレ、ダイ。で、オレは着いたらすぐにルーラで戻って応援を連れて戻る。着いたらその中からまたルーラを使える人が戻って、また応援を連れてくる。そんな感じだな」
「そうだな」
「待って、ヒュンケル！　私も行くわ！！」
　エイミの叫びにも似た声に、レオナは眉間を顰める。
「マァムさんが非戦闘員を守っているのでしょう？　私が代わります」
「エイミ？」
「そうすればマァムさんは戦闘に加わることができるし、もしもその場で待機となっても、気にせずに戦えるようになるわ」
「そうだね。いいんじゃない」
　ダイがあっけらかんと同意する。

「姫様はアポロと第二陣の準備をなさってください」
「……わかったわ」
　レオナが頷くのを確認をして、オレはダイとポップの肩を抱く。エイミは「ポップ君、よろしくね」と短く言って、ポップの肩に手を当てた。
「村の入口へ！」
　口に出さなくてもいいのかわからないが、オレは場所を思い浮かべてキメラの翼を使う。

　――――　飛ぶ。

　マァムの元へ。

◇

　軽く食事をして、「小さな声で、果物の名前を当てるゲームをしましょう」とマァムの提案で、ジェスチャーからどんな果物か当てるゲームをする。
ネイル村の名産の林檎を思い浮かべて手を動かせば、男の子は首を傾げて考え込む。閃いて叫びそうになっても、小さな声で口を押えて「しぃー」と言いながら笑う。
　大きな声を出さないゲーム。
　そう告げれば、こしょこしょと話すのが楽しいらしく可愛い笑い声が響いた。

　そんなに長い時間ではなかったが、外から雄叫びが聞こえ始めた。
　ヒュンケルが仲間を連れてきてくれたのだろう。

誰を連れてきたかはわからないが、私たちの仲間が来たのなら、この村にいる悪者は一網打尽だ。
「！」
　外の気配に親子を背に庇い、戦闘態勢を取る。
　コツコツ。
　外から窓が叩かれる。
「マァムさん、開けてもらえる？　エイミよ」
　エイミさん？
　告げられた名前に首を傾げて窓際に寄れば、確かにエイミがいた。ここまでどうやって上がってきたのだろう。疑問は沸くが、仲間が来てくれたことは確かだ。
　マァムは窓を開けてエイミを招き入れる。
　彼女はいつもの短いスカートではなくパンツスタイルだった。
「非戦闘員の護衛を変わります」
「え？」
「キメラの翼では大人数を運べないから、助けに来たのはダイ君、ポップ君と私の三人。ヒュンケルとダイ君が盗賊を捕まえに行って、ポップ君が応援を呼びに戻っているの。だから、マァムさんはヒュンケル達を手伝ってあげて」
「……ええ、わかったわ」
　マァムはさらに疑問を浮かべるが、それを抑えて頷く。不安そうな女性と子供たちに笑顔を向けて「このお姉さんは、とっても強いの。安心して。私は悪者を代わりにやっつけてくるわ！！」
　ウィンクをすれば、女性が安堵の息を零す。
「……お気をつけて」
「はい！　エイミさん、よろしくお願いします」
「わかりました」
　マァムは窓から飛び降りて、気配を探る。
　人間相手にヒュンケルが負けるとは思えないし、ダイもいるから大丈夫だとは思うが、心配なのは変わりがない。
　――――　待ってて！！
　私はヒュンケルに向かって、全速力で駆け出した。

◆

　村の入口に着いて、ポップはすぐに村の名前を確認するが、村名を記した石碑は削られていて、わからなくなっていた。
「すぐ戻る」
　ポップの短い声に「頼む」と声を掛ける。
　するとポップははにかんだように笑って「おうよ！」と拳を掲げる。
　鋭い音と共に飛び立つポップ。
　速度も人数も、キメラの翼とは段違いだ。
　今は一人だから余計に速い。
　残った三人で隠れながら村を進む。
「あの建物の三階の角の部屋にマァムがいる。アバンぐらいの年齢の女性と小さな子供と中くらいの子供がいる。女性は妊婦だ」
「……ヒュンケルって、そういうところテキトーだよね」
　なぜかダイがくつくつと笑う。
「エイミさんはトベルーラ使えるようになっていたよね。任せていい？」
　ダイの言葉に目を瞠る。
「……はい。ルーラまではまだできなくて」
「トベルーラが使えるだけでも凄いと思うよ。あとちょっとでルーラも使えるようになるって」
　朗らかにダイが言うのを、オレはただ頷くしかない。
　魔法素養のないオレではどんな発言も信憑性に欠ける。だが……
「いや、それでも助かる。オレは魔法はからきしだからな」
　オレの言葉にエイミは苦そうに微笑むと、静かに宙に浮かんだ。

「じゃあ、思いっきり暴れよっか！」
　ダイがぐるぐると肩を回す。

「基本は生かしたまま捕らえる。どうするかはレオナの仕事。で、いい？」
「ああ、かまわない。オレは……極力この国では人を殺したくない」
「ん」
「あと、縄で縛るの面倒だから、穴掘ってそこに投げ込まない？」
「ああ、それはいいな」
　オレは闘気技を使って、余程の戦士でないと抜け出せなさそうな深い穴を掘る。意外と大きな音がした。
「お前らっ！　何者だ！？」
　あからさまに悪いことをしています……という面（ツラ）の男共がわらわらと集まってくる。
「じゃあ、オレ、周辺巡ってこの穴に追い込むね！」
「わかった」
　たっと駆け出したダイは、盗賊を蹴り上げながら空に舞う。蹴られた男は穴に落ちていった。「まずは、ひとりっ！」笑いながら駆けながら、ひょいひょい捕まえては穴に放り込んでいくダイ。下手に剣技や刀技を使えば、うっかりと殺してしまうかもしれない。人間は脆い。
　オレは、川で鮭を捕まえる要領でひょいひょいと盗賊を穴に放り込む。
　そんな感じでかなりの量の盗賊を穴に放り込んでいると、「ヒュンケル！」という愛しい存在が自分の名前を呼んでいる。
「マァム、ここだ！」
　手を上げて呼べば、後ろから盗賊が殴り掛かってきた。お辞儀をするように避けて、足払いで穴に放り込む。
　汚い悲鳴が響く。
「……あ……あらぁ……大漁ね」
「食べられんがな」
　掘った穴にはかなりの量の盗賊が倒れ重なっている。
「ヒュンケル～もう一個、穴掘って～」
「ダイ！」
　マァムが駆け寄ると、大量の盗賊を両肩に担いだダイが現れた。

「この野郎っ」
　まだ元気なはぐれ盗賊がいた。森から現れたその男は、ダイに襲い掛かろうとする。が……
「ペタン！」
　べたっと盗賊がその場に伸される。
「「「ポップ！」」」
　三人ともがキラキラと瞳を輝かせてポップを振り返る。ダイは両肩の盗賊を駆け寄ってくる兵士に渡して、駆け寄る。
「結局、『ペタン』にしたの？」
「いや、ベタンってうっかり言っちまうと、人間絨毯になっちまうから、別の呪文名のがいいからな」
　三対の『凄い！』というキラキラした目にポップはたじたじと、まるで言い訳のようなことを言う。
「ちょっとぉ……この穴に落ちてる盗賊、どうすればいいの？　ルーラ？……まあ、その前に、お疲れ様、みんな」
　ニコッと笑うレオナに、マァムとダイが駆け寄る。後ろから付いてくるマリンは驚愕の表情を浮かべていた。
「ポップ、すまない」
　礼を言いたいのに、素直に言えないオレに、ポップは困ったように……でも笑いながら唇を尖らせる。
「そういう時は、『ありがとう』って言うんだぜ、ヒュンケル」
「……ああ、ありがとう。ポップ」
　これまでも、今までも……この少年魔法師には感謝しかできない。
「あのさ……なんで、あの時……オレの名前を呼んだんだ？」
　ポップが遠くを見ながら聞いてくる。
「あの時？」
「さっきの、助けが必要だった時」
「ダイと姫とポップが同時に浮かんだが、ダイと姫は政務があるだろうと判断した。こういう小狡い連中は何をしでかすかわからないから、頭の回転の速いポップが最適だと考えたのだが、合っていたな」
　あの指示の速さは見事だった。

うむうむと頷きながら言う。
「何の話をしているの？」
　マァムがひょこっと顔を出す。
「ポップが頼もしいという話をしていた」
「ぐぅ！」
　オレの言葉に、ポップが頬を朱に染める。
「本当よね。レオナからヒュンケルが真っ先に助けを求めたって聞いて、私も同じようにポップに助けを求めるなって思ったの」
「え？　オレ？」
「そうよ。レオナとかダイだと正面からズガーンってやっちゃいそうだけど、ポップだったらいろいろなこと考えて動いてくれるだろうなって」
　マァムが満面の笑顔でそう言う。
　オレも頷いて同意をする。
　ポップはなぜか胸を押さえている。
「ポップ、とりあえず外に居た盗賊はだいたい捕まえたと思うけど。後考えた方がいいことはない？」
　マァムが穴の方向を見ながら尋ねる。
「これだけの規模の盗賊の村なら、非戦闘員が多数いるはずだ。あいつらだって飯も食うし、寝たりもする。その人たちを助けて、後は山狩りもした方がいいだろう。なるべく偉いヤツを捕まえて情報を引き出して、他の拠点も潰さないといけない」
「じゃあ、私、エイミさんのところに戻るわ。あの親子が心配だもの」
「いや、心配はないようだ」
　気配を感じてヒュンケルが振り返れば、そこには女性と子供たちを連れてレオナの方へ向かうエイミがいた。
「姫様、盗賊に囚われていた人たちを連れてまいりました」
　後ろの方から、老人や女性、子供が現れる。みんな草臥（くたび）れた姿をしているが、表情は明るい。アポロが後方で老女を抱き上げているのが目に入る。
「あ、あのっ……」
　女性が近付いてきて、マァムとオレの前で深く頭を下げる。

「ありがとうございます！」
　隣の子供はきょとんとしている。
「頭を上げてください……怖い思いをさせてごめんなさい」
「え？」
　首を傾げられる。
「抱き上げて三階まで飛んだの、怖くなかったですか？」
　マァムがあたふたと尋ねるが、女性はふわりと笑うと「今までの恐怖に比べたら、あれくらい爽快なくらいです」と答える。
「お姉ちゃん、悪い奴はもういないの？」
　きょときょと周囲を見渡しながら子供が問う。
　大勢の大人、兵士、縄縛られる見慣れた男共。子供にとっては不思議な光景だろう。
「そうよ、悪い奴らはみんな穴の中よ！！」
「穴の中！！」
　あなのなか～あなのなか～と子供がぴょんぴょん歌いながら跳ねるのを、母親とマァムが相手にしている。
「ヒュンケル」
　呼ばれて振り返れば、レオナが立っている。
「これから山狩りを行います。残党を探して、並行して捕まえた盗賊から事情聴取をして他拠点も潰していくわ」
「お願いします」
「あとは、パプニカ王家が引き受けます。ヒュンケルとマァムは旅に戻って大丈夫よ」
　その言葉に、子供と遊んでいたマァムが動きを止める。
「……あの……」
「心配しないで、マァム。悪いようにはしないわ」
　レオナの笑顔に、マァムは安堵の息を零す。
「レオナがそう言ってくれるなら安心ね。あのね、あのお姉さんはとっても頭がよくて国のことをよくしてくれるの。知っていることを全部正直に話して、これからを相談してみてください」
　マァムが女性に微笑む。
　その微笑を見て、女性は口元を両手で覆って泣き出した。
「……あ、りがとう……ございます」

その女性の肩をエイミが抱き締める。
「向こうへ行きましょう。ボクも一緒に行きましょうか」
　女性は頭を下げながらエイミに連れられて、他の人たちがいる場所へ歩いて行った。
　そんな女性の姿を、マァムが見つめている。
「マァム」
　ヒュンケルが名前を呼ぶと、マァムはヒュンケルの傍まで来て、そして微笑む。
「落ち着いたら……会いに行くわ」
「ああ、そうだな」
　人というのは、真実のみ話すとは限らない。
　人間には表裏がある。
　妊婦という状況で、あの女性は……今はおとなしくしているが、母屋と思われる建物の三階角部屋を与えられる女性だ。何があるかは、わからない。本人も昔は盗みに関わっていたり、首領や幹部の妻だったりするのかもしれない。
　だが、それをわざわざマァムの前でいうことはないだろう。ただ、姫には懸念を伝えておくべきだ。
　そう判断して姫の姿を探すと、彼女と目が合う。
　姫は可愛らしくウィンクをしてくる。
　――――　オレの懸念など、彼女にとっては当たり前のことらしい。
　オレは素直に頭を下げる。
「……なんだか、アバンの使徒って年齢が下の子ほど優秀よね」
　呆れたようなマァムの声に、オレは声出して笑う。
「それだと、オレが一番出来が悪いな」
「ええっ！？　そういう意味じゃないわよっ」
　大慌てで否定するマァムに笑いが零れる。
「いや、今、オレもそう思っていたところだ」
　くつくつと笑う。
「あ、じゃあ、オレが一番優秀？」
　へへっとダイが嬉しそうに笑う。
「ああ、ダイがあと頑張るのは力加減だけだな」

「へっ、言えてらあ。パプニカ城のドアノブ、今月で何個壊したんだよ」
「先生に教えてもらって、アバカム使って扉開けた方がいいかな？」
「いや、鍵を開ける呪文だろう、あれは」
　ポップとダイのやり取りに微笑む。
　そうやって微笑ましい言い合いを見守っていると、急にダイがオレたちを振り返る。
「やっぱり、ヒュンケルとマァムがそうやって並んで見守ってくれるとほっとする！」
　満面の笑顔で告げられて瞬く。
「ああ、お似合いだぜ。二人とも」
　ポップが泣きそうな笑顔でそう重ねる。
「マァム、すっげー綺麗になった」
「へ？」
「前々からそう思ってたんだけど！　出会った頃から可愛いって思ってた。綺麗で素敵だって思ってた。どんな衣装を着ても可愛いって思ってた」
　突然の褒めちぎる言葉の数々にマァムは目を瞠った。
　ポップはぐりっとヒュンケルを見やると「お前は格好良過ぎる！！　狡いだろ！！」と叫ぶ。
　今度はヒュンケルが目を見開く。
「抜群のタイミングで助けに来るし、オレのこと、なんか妙に信頼してくれるし、お前が現れると本当に安心して、心の底から助かったっていつも思ってた」
「「ポップ」」
　オレとマァムの声が揃う。
「まださ、複雑な気分がないって言ったら嘘になるけど……でもさ、オレは二人が結婚するって聞いて、自分のことのように嬉しかった。本当だ」
　それを疑ったことなどない。
　ポップは……ただ、素直になれないだけで、いつだってオレのことを信じてくれていた。

「二人がさ……オレのこと、あんなふうに信頼してくれてるって……知ってたけど、たぶん落とし込めてなかった。ありがとな」
「ポップ……なんかしんみりし過ぎ……」
　ダイの言葉に、ポップが顔を赤らめて叫ぶ。
「……花嫁の父親の心境なんだよ、オレは！！」
　ポップの言葉に、ダイもマァムも、そしてオレも目を見開く。
「ヒュンケル、マァムのこと、泣かすんじゃねえぞ！　マァム、ヒュンケルのこと、嬉し泣きさせろよっ！　そして、オレ等に見せろ！！」
　ふんっとのけ反るポップに、マァムが笑い出す。
　軽やかな笑いに釣られてオレも笑う。
「ああ、泣かせない」
「わかったわ、ヒュンケルのことたくさん嬉し泣きさせてみせるわ！！」
　マァムの言葉に、オレは目を瞬かせる。

　……どんなことをされるのか……期待半分、恐れ半分だ……